**№13　テーマ『人生は意志と愛のドラマ』**

**講話日2013年5月10日**

**皆さんこんにちは。だいぶ気候も今日もあったかくなってきて、ようやく寒い冬を過ぎて、外で活動するのも少し楽になってきました。景気の方もだいぶ良くなってきたような、そういう雰囲気が多くのところで出てきております。なんとかこういう良い流れがずっと続いていたらいいと思うんですけど、なかなかそう簡単に実体経済にまで波及するような、そういう経済効果というのは難しいと思うんですけど。でも頑張ってやっていくしかないと思いますので、こういう環境の中でどういう風な思いを持って我々はこれからの人生を生きていったら良いのか、そういうことを考えながら今日は「人生は意志と愛のドラマ」であるという感性論哲学の根本原理を展開しながら、我々の仕事の仕方や生き方についてお話をさせてもらいたいと思います。**

**まず人生に本当に必要なものは２つしかない。この人生を生きる基本原理また仕事をしていく上での基本原理をしっかりと押さえて、あまり複雑に人生を考えるのではなく、もっとも簡単、単純明瞭な原理をしっかり足元に踏まえて、人生を生きていく力をものにしてもらいたいと思います。なぜ、人生にとって本当に必要なものを２つしかないと言えるのか。人生というのは人間としての命を生きるという内容を表現してあるんじゃないかと思うんですけど。人間としての命というものを生きるということを考えると、まずは生命というものを土台にしながら、人生を考えていかなければならないってことになってきます。そういう観点からすると、よく知られていることですが、生命の目的と言われるものは２つしかないっていうのが、生物学上あるいは命というものを考える場合の常識であります。**

**それは、自己保存と種族保存である。これは中学の教科書にも出てくるような、もっとも原理的な命というものに対する捉え方ですけども、生命というものには自己保存と種族保存という目的しかない。生命というものが人間という命の形になったとき、目的は２つなんだけど、では人生の目的はどうなるのか。それを考えると、生命の目的の１つである自己保存の欲求というものが、人間という命から出てくると何になるか。それは意志になる。自己保存の欲求というものが人間という命から出てくると意志になる。これは自己実現の力であって、自己実現、自己創造、自己完成、自分自身を１つの個性ある存在として完成させていくために、必要なものが意志の強さである。意志の弱い人間は何事においても最後まで物事を完結することができなくて、これでは仕事においても人生においても、さまざまな問題において大きな結果を出すことはできないと思います。そういう意味で人生を生きる上でまず人間に求められるものは、意志の強さであると言わなければならない。**

**もう１つの人生の目的は、生命の目的である種族保存の欲求というもの。種族保存という欲求が人間という命から出てくるとどうなるか。それは愛になる。愛とはなにか、人間と人間を結びつける力である。だから愛は人間関係の力である。そして人間関係の力である愛の究極の目標は、素晴らしい人間関係をたくさんつくることである。そのように考えていくと、生命の目的は自己保存と種族保存であるけれども、人間における人生の目的は意志を実現し、愛を実現するところにある。意志を実現するとは、自己実現の人生を歩むことであり、仕事において成功することである。そして愛を実現するとは、素晴らしい人間関係をたくさんつくることである。そのように考えていくと、人生というものをもっとも簡単な形で表現すると、人生は意志と愛のドラマだという表現の仕方ができることになるわけであります。**

**その意味では、我々は人生を生きる基本として、どういう風にして意志の強い人間になるか。そしてどのようにして素晴らしい人間関係をたくさんつくるという愛の実力を持った人間になるか。この２つしか人生というものを生きる根本の原理はない。そして我々は本当に幸せというものを命で感じるということになっていくためにも、我々は仕事において成功する人生を歩まなければならないし、また素晴らしい人間関係をたくさんつくるという人生を歩まなければならない。この２つが共に満たされないと、人間における命の幸せはないんだ。本当に幸せになりたいと思ったら、我々は意志の強い人間になって自分のしたい事を実現して、そして納得のいく人生を手に入れなければならないし、またいろんな意味で家庭においても社会においても、素晴らしい人間関係をたくさんつくる、これが幸せというものを実感することができる根本の原理であります。**

**これは単に一個の人間ということだけではなくて、仕事をする上でも意志の強さは、何事においても最後まで、上手くいくまで途中でやめないで行動し続けるという意志の強い生き方は、仕事においても根本の精神でありますし、また仕事が社会的に広がっていって、うまくいくということを考える上でも、素晴らしい人間関係をたくさんつくる力は、避けて通れない仕事の上での重要な実力という風に言うことができるわけですね。そういう意味で、どうすれば一体我々は意志の強い人間になれるのか。どうすれば素晴らしい人間関係をたくさんつくっていけるという、愛の実力を持った人間として人生を生きていくことできるのか。これは非常に大事な人生におけるテーマであるという風に言わなければなりません。**

**そこでまず第１番目の意志の強い人間になる、そのためにはどうしたらいいのか。基本的に意志の強さは何によってつくられるのか。意志の強い人間というのは、実は欲求の強い人間なんですね。意志の強い人間、それは欲望の強い人間だ。意志の強い人間というのは命から湧き上がってくる欲求・欲望・興味・関心・好奇心という命から湧いてくるものが強くて大きい。そこに本当の意志の強さの根本の原理があるわけであります。そのためには我々は、何とかして自分の命から抑え難き欲求というのものが、ふつふつと湧き上がってくるような自分というものをつくる。それを心がけなければならない。だけども残念ながら、今の時代、「何がしたいの？」と言われても「いや、特に何がしたいとうことはありません」という人が非常に多くて、なかなか抑え難い欲求というものが命から湧いてくるという状態には、なれない。そういう環境、状態に命はあるわけですね。**

**これはなぜそういうことになってしまったのか。生まれてから後の人間の生き方、育て方というものに大きな問題があるのではないかという風に思います。小さい間から躾ということで、あれこれと「こうしなさい。ああしなさい」と言って、自分のしたいこととは違った次元で親から命令されて、躾をされている。そういうことから、生まれてから学校に行くまでの間でも、なかなか自分のしたいことが自分の気の済むようにできるという風な環境ではない。結果としてしたいことはできないで、親の命令や親の支配に従って生きざるを得ないという環境が家庭の中にありました。また、学校に行ってもなかなか自分のしたいことはできなくて、学校の規則や学校での勉強の仕方も先生の言うように勉強させられてしまう。そういう状況になってきて、塾に行ったとしても結局、大学に通るためにはこういう勉強をしないかんということで、苦しい努力をさせられてしまう。そういう意味では、学校に行ってる間も決して自分のしたいことはちゃんとできるという風な環境にはない。しなければならないことをさせられてしまう状況になってくる。**

**家庭においても学校においても、自分のしたいことはできない。自分のしたいことを抑えて、しなければならないことをやっていく。そういう環境がずっと続いてきました。その結果、しなければならないことはわかってるんだけど、自分のしたいことがだんだんと抑えられてきたもんですから、だんだん分からなくなって、結果として命から湧いてくる欲求が抑圧されて、弱くなってしまっている。これが残念ながら今の理性的な時代の人間の悲しい現状であります。しなきゃならないことはわかっているんだけど、したいことは分からない。そういう状態になってしまっている。欲求が抑圧されて自分が抑えられてしまって、そしてしなければならいことしかわからないという状況になって、何をしていいかわからない。そういうことになってきてしまってるということですね。**

**しかし、人間が本当に自分の人生と言えるものをつくっていこうと思ったならば、原理としては、とにかく「俺はこうなりたい、こうしたい」という欲求が湧いてこないと、自分の人生はつくれません。欲求のない人間は自分のない人間である。何がしたいのかわからんということは、自分がないということだ。したいことがわからなければ、他人に言われたことをさせられてしまうという人生になってしまう。これでは自分の人生を自分でつくれない。そのためには、どうしても何かしら自分の命から理屈抜きに湧いてくる欲求というのがなければ、自分の人生をつくれない、自己実現の人生を歩めない。したいことがなければ、それは自分を見失ってるということになってしまっているということになるわけですね。**

**だけども、これまでの哲学や心理学においては、意志というのは理性的につくるもんだと考えられていました。これまでの時代における意志の強い人間は、理性的な人間だと言われておりました。理性的な人間は、自分のしたいことは我慢して、しなければならないことが最後までちゃんと出来るというのが理性的な人間。そういう人を意志が強いと言われておったんですね。意志が強いとは、我慢できるということ。我慢できない人間はダメな人間で、我慢できる人間が立派な人間だというのが、これまでの人間観における評価でした。自分のしたいことは我慢して、しなければならないことが最後までちゃんとやっていけるという意味での意志の強さというのは、片っぽに我慢しなければならないものがあるだけ、その意志の強さには限界がある。しかも我慢するということは、非常にストレスが溜まる。その意味においても理性的にしたいことを我慢して、しなきゃならないことをするという生き方は、非常に無理があるし、辛いし、苦しいし、ストレスが溜まる。**

**そういう意味でも理性的につくられた意志の強さというものは、作為的につくられたものであるがゆえに、限界がある。理性によって作為的につくられた意志の強さというのは、ないわけではなくてあることはあるんですけども、だけどもちょっと何かしら困難な問題にぶつかって、継続してやっていけない状態になってくると、理性でまたやめる理由を考えてやめてしまう…そういう逃げ道がある。我々が人生において求める意志の強さというのは、不撓不屈の意志といって、どんな困難でも乗り越えていくぞという理屈抜きの強さというものが、我々が人生において求める、必要とする不撓不屈の意志という姿であります。**

**それを持とうとするならば、そこには理屈抜きの根拠がなければならない。理屈抜きでどんな困難でも乗り越えていくという意志の強さを持たなければならない。それには理屈抜きの根拠が必要だ。そういう不撓不屈の意志の根拠になる、理屈抜きの意志の強さの原理となるものはなんなのか。それは、理屈抜きに命から湧いてくる欲求の強さ、欲望の強さ、興味・関心・好奇心の強さ。欲望の強さと大きさこそ、理屈を超えた意志の強さの根拠になるもんだと、言わなければなりません。**

**欲求がなぜ大事なのか、それは欲求が命から湧いてこないと人間は行動をやめるんですね。命から欲求が湧き続けている限り、人間は行動をし続けます。命から欲求が湧き続けておれば、自分としてはやめようと思っても、湧いてくる欲求がやめさせてくれない。どうにも止まらないという状態で、命から欲求が湧き続けてくる限り、我々は行動し続ける。欲求とは行動力の原理、実践力の原理だ。命から欲求が湧いてこない状態で何かしようと思ったら、無理やりに理性で自分の肉体に鞭を打って自分の肉体を動かさなければならない。結果として、辛い・苦しい・ストレスの多い人生だ。命から欲求が湧いてきて何かをするということは、したいことをするんだから、そこには無理がない。かえって喜びがある。**

**そういう意味においても、仕事における、人生における生き方において、理屈抜きに湧いてくる欲求が、どれほど人生において大切なものなのか。人間の生き方において大事な原理なのか。これを分かってもらいたいと思うんですね。だけど、現実にはなかなかそれほどの湧き上がる欲求を持って仕事をするという状態に命がある人というのは非常に少ないじゃないかと思うんですよ。では、どうすれば我々は仕事においても、また人生に生き方においても、命を燃やして湧き上がる情熱を持って、人生を生きていくという力を自分のものにすることができるのか。どうすれば一体自分の命から抑え難き欲求が湧いてきて、命が燃える状態になるのか。**

**理性では命は燃えられませんからね。燃えて生きるということは、命から湧いてくる欲求・欲望・興味・関心。好奇心というものしか命を燃やす働きはしない。なぜ、命が燃えるということがそれほどに大事な人生の課題なのか。それは命が生きたい、生きたいと思ってるもんなんですけど、生きたい、生きたいと思って命が一番輝くとき、それは生きたい、生きたいと思っている命が、「このためならもう自分は死んでもいい」「このために生きて死ねたら本望だ」という何かにぶちあったとき、命はもっとも美しくも激しく燃え上がる。そのとき、一番命は生かされるんですね。命が燃えるという状態になるためには、何かしらは我々は「このためになら死んでもいい」「このために生きて死ねたら本望だ」というものに出会う必要がある。「このためなら死ねる」「このことに命をかけよう」というものがあって、初めて命は輝く。命は燃える、命は生かされる。命というのは、常に燃えたいというか、燃えて輝いて生きるという状態を求めておるんだという風に言うことができます。**

**そういうことを考えると、どうすれば我々はそういう命をかけてもいい、このためなら死んでもいいと思えるような状態になるのか。どうすれば命から抑え難き欲求が湧いてきて、そういう状態になれるのか。そのことをやはり自分自身の人生を素晴らしいものにするために、考えなければなりません。それを考えるためには、まずは命というものは、人間の命の本質というものは心だと言われる。人間の本質は心だ、人間の心とは何なのか。心とは意味と価値を感じる感性だ。人間は意味を感じないとやる気にならない。価値や素晴らしさを感じないと命に火がつかない。心とは意味と価値を感じる感性だ。**

**そのことを考えると、人間が最高に意味や価値を感じるとき、我々は「このためなら命もいらん」という思いになれるわけなんですね。日常の仕事を考えていると、なかなか仕事の一つ一つに意味や価値を感じながら、その仕事をしているという風な状態というのは案外とはっきりしないですね。だけど、意味を感じないでその仕事をしているということは、結果として意味のないことをしているんですよ。価値を感じないでその仕事をしているということは、価値のない仕事をしているんですよ。その意味においても、我々は常に今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさやすごさをちゃんと感性で感じながら、仕事をするということが非常に、プロとしての仕事の仕方として大事な課題になってきます。プロというのは今自分のやっている仕事の本当の素晴らしさ、本当の値打ちを一番よく知っている人。**

**意味を感じたら、価値を感じたら、命が燃え始める。生きがいを感じ始める。意味や価値を感じないと人間的な価値ある人生、人間的な意味ある人生を生きることができません。意味と価値を感じてこそ人生だ。意味と価値を感じてこそ、人間として人生を生きるという価値が出てくる。それでもっともっと我々は今自分のやっていることの意味や価値や値打ちや素晴らしさを深掘りして、今自分でやっていることに意味や価値を感じる自分というものをつくっていく努力をしなければならないんじゃないかと思うんですね。特に組織の中で仕事をしている場合には、今自分のやっている仕事が組織全体の中でどういう役割、立場にあるのか。自分がもしこの仕事をしなかったら、組織全体の仕事の流れが止まってしまうとか。自分に与えられた仕事というものが、組織全体の中でどういう意味や価値や値打ちや素晴らしさというものを持っているのか。どれほどかけがえないものなのか。どれほど貴重とされているものなのかをちゃんと自覚しながら、それを感じながら仕事をしていることが非常に自分が仕事をしようとする気になるためにも必要だし、また仕事の質を高めていくという、仕事を水準を高めていくためにも、今自分でやっている仕事の意味、価値、値打ち、素晴らしさを感じている感性が、現実の仕事には非常に大事であります。**

**そういう意味、価値、値打ち、素晴らしさを感じると、それに従って必ずやる気が湧いてくる。興味・関心が湧いてくる。命から湧いてくるというものを我々はつくり出すことができるわけであります。もっともっとお互いに自分たちのやっている仕事の素晴らしさや意味や価値や値打ちというものを深掘りしていって、お互いに今自分たちのやっている仕事の凄さを教え合ったり、語り合ったりというときを持つ必要があるのではないかなと思いますし、また朝礼やいろんな全体集会の中で、今自分たちのやっている仕事は、どんなに大切な、どんなに価値のある、どんなに素晴らしいものなのかということをお互いに発表し合う、語り合う、お互いに感じ合う時間を組織としては持つ必要があるのではないかという風に思います。**

**基本的に欲求というのは、言葉を変えれば命が喜ぶ理想のことなんですね。欲求というのは自分のしたいことですけどね。今の自分の命が何をすれば幸せを感じるのか、喜ぶのかを教えてくれるのが欲求である。欲求とは、まだ実現されていない理想のことだ。生きるとは、命が喜ぶ理想なんだ。命が喜ぶ理想としての生ききる目標、目的というのを我々はどういう風につくることができるか。それを考えないと自分の人生をつくっていく目標ができません。どうすれば我々は自分の命から欲求が湧いてくる状態になれるのか。そのことを考えると、方法論としては、理性を手段能力として使って、自分の命に問いを発する。人間にとって一番大事な問いはなんなのかと言えば、自分自身に対して「どんな人間になりたいのか」を問う。人間と言っても男と女だけですから。男であれば、自分が自分に対して「お前はどんな男になりたいんだ」と自分に問うて、自分の命から「俺はこんな男になりたい」という欲求を引きずり出す。これからが命が喜ぶ理想を自分が持って生きるという力をつくっていくための方法論です。そういう欲求が命から湧いてくれば、湧いてきた欲求を実現するために生きるということが、人間として幸せな、命が燃える喜びのある人生だということになってくる。欲求と言ってもただの欲求では野獣です。人間的に価値ある欲求を持たなければならない。**

**それはどういうことなのかと言ったら、仕事においては、今自分のやっている仕事はどんなに素晴らしいのか、またどんな意味や価値や値打ちがあるのか。そのことを深堀りしていって、意味や価値を感じると欲求が湧いてくる。興味・関心が湧いてくる…そういう構造をつくりながら、仕事に命を燃やすというやり方がある。今申し上げたように、「どんな人間になりたいのか」「どんなことがしたいのか」「将来どんな生活がしたいのか」を自分に問うて、自分の命から「俺はこんな人間になりたい」「俺はこんな男になりたい」「俺はこんな自分になりたい」「私はこんな女性になりたい」「自分はこんな営業マンになりたい」「自分はこういう仕事がしたい」そういう欲求を自分の命から引きずり出すことによって、欲求を自分が持つことによって命を燃やして、そして欲求が意志の強さをつくって原理になりますから、実現できるまでその欲求に向かって行動をし続ける。うまくいくまでやめない。結果が出るまでやめないという生き方ができる。**

**とにかく意志の強い人間になることを原理的に考えた場合、意志の強さの原理は欲求。欲求が湧いてこなければ意志の強い人間になれない。欲求を沸き立たせる基本原理は、意味や価値を感じること。そして自己実現のために大事なことは、理性を使って自分の命から欲求を引きずり出すという方法である。その２つが理屈抜きに欲求が湧いてくる、抑え難き欲求が湧いてくるというやり方なんですね。**

**人間は自分が意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じた程度にしか仕事はできません。どの程度意味や値打ちや価値や素晴らしさを感じているかによって、その人の仕事の仕方、その人の情熱のかけ方が違ってきて、同業他社との差別化ができていくことになるわけであります。また命から欲求が湧いてくれば、それに従って理性も成長するんですね。したいことがあるとね、それを実現するためにどうしようかと思って理性で考えるんですよ。意志の強さは、理性をも成長させるんですね。欲求があればいろんな知恵が湧いてくる。いろんな気づきが湧いてくる。「こうしてみようか、ああしてみようか」と理性で考える。そのことによっても意志というものが持続して、成長していくことになってきます。**

**多くの人がもっと幸せになりたいという基本的な欲求を持っていると思うんですけど、すべての人が基本的に持っているもっと幸せになりたいという欲求すらも、残念ながら今の時代においては衰えてしまっているんですね。やはり、欲求とか欲望というものは、醜いもので卑しいものであまり良くないという倫理観、意識というものが非常に根強く残ってますよね。仏教にしてもあるいは儒教にしてもいろんな宗教が皆、欲望というものを下等なものとして、否定するようなことになってしまって、欲求、欲望があるということは醜いことなんだ、人間としてダメなことなんだという意識も随分働いているんじゃないかと思うんですね。それは人間でありながら、神や仏のような汚れなき心情というものを理想とするようなことから、出てくる欲求、欲望の否定ということじゃないかと思うんです。人間である限り、我々は欲求を持たないと人間としての人生を生きがいのある幸せなものとして生きていくことはできません。人間において欲求、欲望を否定するのは、人間そのものを否定することなんだと考える必要があって、欲求があってこその人生、欲望があってこその人生という人間観も、これからの時代を生きていくためには必要であって、我々は人間であることに喜び・誇りを感じて人間を生きるという、それをこれから実践していかなければならない。人間でありながら神や仏のようなものを求めるんじゃなくて、人間であることに徹する、人間を生きる生き方に目標を変えていかないといけないと思います。**

**とにかくは人間における抑え難き欲求の大切さをわかっていただいて、自分の命から抑え難き欲求が湧き上がってくる自分をつくり続ける努力をしていかないと、人間として喜びを感じる人生を生きることはできません。とにかく欲求、欲望の強さが意思の強さの第１原理だということをよく分かっておいてもらいたいと思います。どうすれば我々は仕事に燃えることができるのか、どうすれば今自分のやっている仕事の意味や価値や値打ちや素晴らしさを感じて生きることができるのか。そのことをもっともっと皆で考えて、話し合ってお互いに教え合って、そしてお互いに助け合って命を燃やして生きるという組織をつくる努力をしてもらいたいと思います。**

**意志の強さをつくる第２番目の原理は、意志は決断によって決まるとレジメに書いてあると思うんですけど、意志は決断によって決まる。意志の強さの根本原理は欲求であって、欲求の強い人間しか意志の強い人間になれない。人間において必要なのは、意志の強さであって、意志と欲求とは次元が違うんですね。欲求、欲望が強いだけでは野獣なんですよ。どうすれば我々は、動物的な欲求、欲望の強さというものを人間的な意志という、人間的に価値あるものに変えていくかを考えなければなりません。本当に意志の強さをつくる人間的な原理は別にある。それも大事なんだけど、それだけでは意志ではない。どうすれば欲求の強さが意志の強さに転化するのか。そのことを考える必要がある。例え話をすると、金が欲しいというのは欲求なんですよね。金が欲しい欲求が湧いてくると、人間は理性を使ってどういう風にして金を手に入れようかと考えるわけですね。金を手に入れる方法は仕事をすることもあるし、宝くじを買うこともあるし、競輪や競馬もあるし、カツアゲもあるし、ひったくりもあるし、いろいろ金を手に入れる方法はあるんですけども、その金を手に入れる方法の中で、「よし、この方法で金を手に入れよう」と自分が決めたとき、意志が決まるんですね。欲求は金が欲しいということなんですけど、意志になるためには欲求を実現するための方法を理性で考えて、そして理性でこの方法で金を手に入れようと決めたときに意志が決まる。ということは、欲求と意志との間には、理性でいろいろと考えて決めるという決断という行為がその中に介在する。そう考えなければならない。人間的に価値ある意志は、決断という行為によって決まるんだ。決断とはなんなのか。決断というのは普通考えた場合、あることに決めるということを決断という風に言ってしまってるわけですが、決めただけでは決断の中の決だけで、断ということはまだ入ってきてない。本当に決断して本当に価値のある意志をつくるためには、断ということがちゃんとわかっていないと、本当の意志の強い人間にはなりません。**

**決断とは、多くの可能性の中からのある１つの方に決めるんですけども、決めただけでいってしまうと、結果として必ず悔いと迷いが残る。悔いのある人生、迷いの人生になってしまう。それはなぜか。決断の最たるものが結婚であり、また就職であるということになるわけですけども。結婚なんかでも「この人と結婚しよう」ということは決めて、決めただけでいってしまうと、必ずどんな人と結婚しても、人間は不完全ですから問題や悩みは出てくる。問題や悩みが出てくると、そのたびに「こいつと結婚したのは失敗だった」「あちらの人と結婚しておったらこんな問題、こんなことにならなかったのに」ということになってきて、一緒にして自分は不幸になってしまう。ひょっとしたらと思ってしまうと、自分を不幸にしてしまう。それにより意識が分散するから、今自分が決めたその人に自分の全情熱を傾けることができなくなってしまう。また相手にも十分な満足を与えることはできなくなってしまう。決断と言っても決めただけでいってしまうと、結果として悔いが残る。ひょっとしたらあちらの方がと思うことは、理性ゆえの迷い。結局自分も不幸になってしまって、相手も不幸にして、やること全部半端になってしまって、人生に悔いが残って迷いの人生になってしまう。**

**悔いのない、迷いのない人生を本当に我々が歩みたいと思うならば、ある人を選んだならば、そのとき自分が選ばなかった人の中にどんなに素晴らしいものがあっても、ある人を選んだならば他の人への想いを断ち切る、このことを断と言う。決断とは捨てる勇気だ。捨て去る、決断して切るということが、決断することの最も大事な行為であります。あるものを選んだときに他のものへの可能性を断ち切る、逃げ道を塞ぐ、退路を断つ。自分にはこれしかおらんと。そういう思いになったとき、我々は本当に成功と幸せの本道に入ったという風に言うことができる。**

**大事なことは、どの会社に就職しても、どの人と結婚しても、必ず自分が不完全なるがゆえの問題と悩みは出てくるんですよ。出てこない道を探し求めることは、人生からの逃げだ。問題の出てこない道はない、問題の出てこない就職はない、問題の出てこない結婚はないんだ。だから我々は問題が出てきた時にたじろいではならない。問題が出てきたときにひるんではならない。生きるということは、自分が不完全なるがゆえに出てくる問題を引き受けて、乗り越え続けていくこと。それが不完全なる人間が人生を生きることの意味であります。**

**ある人を選んだならば、ある会社を選んだならば、あることに決めたならば、いろんな問題が出てきてもそれは自分が不完全なるがゆえの問題であって、誰と結婚しても会社に入ってもどの道を選んでも、自分が不完全なるがゆえに問題が出てくる。どんな問題かは五十歩百歩であって、そう問題ではない。問題は、相手の責任じゃない、全部自分の責任なんだ。引き寄せてしまう。自分が不完全なるがゆえの問題と悩みしか出てこない、それが人生だ。問題や悩みが出てこない道を探し求めるのは、人生からの逃げであり、仕事からの逃げだ。自分が不完全なるがゆえに呼び寄せるんだ。本当に我々は決断して、ある１つのものを選び取ったら、自分にはこの道しかない、自分にはこの人しかいない、自分にはこの会社しかないと、そういう思いになって、出てくる問題をバカになって虱潰しに乗り越えていく腹構えができたときに、その人は確実に人生の本道に入ったと言える。出てくる問題を嫌がっていては人間をやめなければならない。**

**決断とは捨てる勇気である。それができない人間は、必ず人生において迷い、悔いを残す。迷いのない、悔いのない人生を一直線に歩んでいこうと思ったら、本当に決断する必要がある。決断をしたら、どんなものを選んでも問題は出てくるのだから、自分が選んだ道で出てきた問題や悩みを乗り越え続けていくしか、自分の人生はないんだ。そう自分が腹に決めたとき、不撓不屈の意志、どんな困難でも乗り越えていくぞという、本当の意志の強さが出来上がってくるわけであります。人生における決断の大切さを忘れないでおいてもらいたい。大きな問題が出てきて、それを乗り越えると大人物なんですね。小さな問題しか乗り越えていないと小人物なんですね。歴史に名を留めるような大人物は皆、大きな問題を乗り越えた人間なんです。乗り越えた問題の大小によって人物が決まる。それほどに決断という心構えに基づいて、どんな問題も乗り越えていくぞと。どんな問題でも俺が決めた人生だと。誰に代わってもらうものでもない。どんな問題でも俺に任せておけ、心配するなと、皆を安心させてその問題から逃げないという姿勢が、意志の強さをつくるわけであります。**

**次は第３番目ですね、問題や悩みには必ず答えがある。本当に意志の強い人間として人生を生き抜いて行こうと思ったら、問題や悩みに答えがあるんだ。答えのない問題はないんだ。それを信念として持ち続ける必要があるんですね。問題や悩みに答えがある、答えのない問題はない。皆、失敗をする人はいろいろ考えて、なかなか答えが出てこないと、もうダメだと思って万策が尽きたと途中でやめてしまうんですね。これは失敗の人生。そういう失敗の人生にならないためには、どんな問題でもどんな悩みでも必ず乗り越えられる。答えは出てくるんだという信念を持って生きるということが大事です。これはどういうことなのかと言ったら、本当の問題というのは今自分の持っている力では如何ともし難いというのが本当の問題なんですよ。今自分の持っている力でなんとかなる問題は、そんなものは問題じゃない。本当の問題は、今自分の持っている力で何ともならん。如何ともし難い。万策が尽きたというのが本当の問題なんだ。そういう問題というのは、自分が求めるもんじゃなくて、そういう問題は求めなくてもやってくる。**

**問題というものは、命を生んだ母なる宇宙がその命を成長させるためにその命に課する課題、それが問題なんです。問題というのは愛ゆえの試練。母なる宇宙の摂理の力によって地球上に命は誕生しました。その命の誕生という結果、地球上で命が永らえていくために地球上にはさまざまな環境の変化が次々と起こるんですね。環境の変化というのは、うっかりすれば全生物が絶滅するかもしれないほどの大きな問題のこと。これも何故に生じるのか。そういう問題が起こらないと、命は進化しない。環境の激変が起こることによって、命は環境の激変に対応して、新しい能力を命から引っ張り出して、そして新しい環境に適応するために命の形を変えていく。それが進化という歴史であります。全生物が絶滅するかも知らんと言うほどの環境の激変という問題も、子なる命を成長させるために母なる宇宙が与えた愛ゆえの試練だと言わなければならない。**

**どういうことなのかと言うと、一般的に言うと問題というのは、その人間の命に内在する潜在能力を引き出すために出てくる。問題というのは潜在能力を引き出すために出てくるんだ。問題が出てこなければ、新しい能力は必要ない。問題が出てくるから新しい能力が必要なんだ。今自分の持っている力で何ともならんという問題が出てくるから、まだ出てきていない命に潜在する能力が出てくるという順番が来る。これが潜在能力の湧出。とにかく問題は人間を成長させるために出てくる。問題や悩みは会社を発展させるために出てくる。社会においても起こってはならない犯罪すら、何故に犯罪は起こるのか。それは社会を良くするため。犯罪が事故が起こらなければ社会は停滞する。起こってはならない犯罪、事故すら、社会を良くするために天が与えた試練だ。犯罪を願う人はいないし、事故を願う人はいないけど、だけど世の中から犯罪と事故がなくなることはないんですよ。**

**よく昔言った言葉ですけどね、石川五右衛門という人、知ってますよね。大泥棒と言われた石川五右衛門先生の有名な言葉で、「浜の真砂は尽きるとも世に盗人の種は尽きまじ」という言葉があって、海岸の砂浜の砂利がなくなることはあっても、盗人がなくなることはない。それほど泥棒はなくならないという言葉なんですけどね。これは言ってみれば、悪人はなくならないということ。悪がどうすれば良くなるのかを教えてくれるために、悪は起こるんだと。そういう構造になっているわけであります。よく「大悪起これば大善来たる」という言葉もよく言われる言葉ですけど、大きな悪いことが起こることによって大きな良いことが呼び起こされるんだと。とにかく問題はあらゆるものを成長させるため出てくる。問題や悩みがなかったら何していいか分からなくなってしまって、あらゆるものは成長しない。問題があって、悩みが起こってくるからどうしようかと思って考えて、成長・発展するんだ。**

**そういう意味においても、我々は決して問題が起こらないことを願ってはならない。問題がなくならないことを願ってはならない。もちろん問題も事故も犯罪も起こって欲しいわけじゃないんだけど、だけども宿命的に人間においては問題や悩みはなくなることなく、起こり続けるもんだ。問題が起こらないことを願うのは、人生から逃げだ。問題を恐れてはならない。問題というものは、母なる宇宙が子なる命に与える愛ゆえの試練だ。問題は自分を成長させてくれるために、お母さんが自分に与えてくれる課題である。そういう理解の仕方をしていなければならない。**

**確かに問題や悩みは嫌なもんで、辛いもんだ。でもその辛さに押しつぶされていたのでは人生負け犬であります。どうすればその問題や悩みを乗り越え続けて、成長していけるか。辛いけど、だけどそれも愛ゆえの試練だ。自分を成長させるためにお母さんが自分に与えてくれる課題なんだ。そう思って、乗り越えていく力をつくっていく。それも意志の力で、これも意志の強さをつくっていく原理であります。とにかく仕事の上でも、人生においても我々は問題が出てくることを恐れてはならない。問題は自分に目標を与えてくれる、仕事を与えてくれる、成長させてくれる。問題というのは、自分に今何をすれば良いかを教えてくれる役割を果たしてくれていると思わなければなりません。**

**そして、問題には答えがある。答えのない問題は出てこない。なんでそういうことか断定できるのか。今申し上げたように問題も母なる宇宙は自分に与えてくれる愛ゆえの試練なんですね。答えというのはどういう風に出てくるか、答えは命から湧いてくるんですよ。答えは命に内在する潜在能力が出てきて、その問題を乗り越えさせてくれるわけですね。それが答えだ。命から湧いてくる潜在能力が答えだ。潜在能力とは何なのか。それは生まれながらに母なる宇宙から自分自身に与えられている遺伝子、それが潜在能力だ。「遺伝子は潜在能力だ」、ということは問題も母から与えられる、答えも問題が出てくる以前から生まれながらに命に母なる宇宙から与えられているんだ。問題も母なる宇宙から与えられて、答えも生まれたときからお母さんが自分の命にあるゆる問題に答えるために、与えてくれている。そして、その問題は、命に潜在する能力を引き出すために出てくる。構造から言えば、問題と答えはつるんでしまっている。仲間みたいなもの。しかも我々の命は宇宙の一部だ。我々一人ひとりが大宇宙の一部分なんだ。命の中には宇宙の力が込められているんだ。そして、人間が本当に必死になれば、火事場のクソ力と言われる信じられない力が命から湧いてきて、命を救うということもある。問題というのは命に内在する答えを引き出すために出てくる。問題が出る以前から答えはあるということ。つまり、どんな問題でも答えはあると言えます。そのことを疑ってはならない。命を信じて、宇宙を信じて、問題を乗り越えるまで努力する、頑張るという生き方が、唯一人間において成功に至る努力の仕方であります。うまくいくまでやめない。答えは必ずあるんだということほど、我々の努力のし甲斐がある原理はないんですよ。答えはあるんだから、出てくるまでやめたらいかん。悩みや問題を持ったときに、悩みながら考えてドツボにはまって考えたら、どれだけ考えても答えは出ないんですよ。考えれば考えるほど迷ってしまって、かえってもうだめだと思って、自ら命を絶つことになってしまうかもしれない。必ず理性を使う場合には、物事を客観的に眺めてみないと正しい答えは出せない。**

**例えば、深い森の中に迷い込んでしまったとする。森の中に迷い混んでしまった人間が、迷いながら進んで行ったら、その森から早く出られるかと考えても、答えは出ません。あっちに行ってみようか、こっちに行ってみようかとやっている間に野垂れ死にしてしまうかもしれない。どうしたら答えが出るのかと言ったら、深い森に迷ってしまった場合には、森の中に生えている一番高い木のてっぺんに登って、そこから森全体を外から眺めるならば、出口までの道筋が一発でわかる。これが物事を客観的に外から眺めてみれば答えが出るというやり方なんですね。これは理性というものは、状況や立場をちゃんと与えてあげないと正しい答えが出せないという不完全な能力だからですね。ちゃんと知っていないと我々は人生において苦しむんですね。考えて苦しむんです。答えを出すんじゃなくって、考えることでますます悩み、苦しむんですよ。本当にちゃんと考えて答えを出して、悩みから抜け出そうと思ったら、理性は客観性と普遍性の能力だ。物事を客観的に外から眺めてみるという立場を与えてあげないと、理性は正しい答えが出せない、このことを知っていることが大事なんですね。**

**これは現実に言ったらどういうことなのかと言ったら、自分が悩みを持ったら、悩みながら考えてはならない。もしこの悩みが他人の悩みだったとして、他人から自分にどうしたらいいだろうねと相談されたら、俺はその人にどう答えてあげるだろうかを考えたら、必ず答えは出てくるんですよ。悩みながら考えると答えは出ない。悩みながら考えると、これから自分がしようとするとマイナス面ばかり見えてくる。「こんなことしたらあの人に迷惑かかるしな。そんなことしたら隠しておきたいことがわかってしまう」「どうしようもないな」「もう俺が死ぬしかないか」となってしまう。しかし、友人に相談すると、「死ね」という友人はいませんから、「まぁ、待て」ということになる。「死ぬ気になったら何でもできる」というのが友人の言葉なんですね。友人は自分の問題ではないから、そんなことが言えるわけですよ。この友人が他人の悩みに対して言う、この言葉が物事を客観的に眺めてみる状況・条件なんですね。**

**どんな問題でも経営の問題でも家庭の問題でも、夫婦の問題でも子どもの問題でも、どんな問題でも、もしこの問題は他人の問題であったとして、他人から相談されたら俺はどうアドバイスするだろうかと、持っていったら必ず答えが出るんですよ。一発で出るんじゃないんだけど、何度かトライしている内にその問題の答えが出てくるんですよ。この方法を知っているかどうかで随分と違いますよ。**

**本当に自分の力で、どんな問題も乗り越えていけるという自信を自分につくろうと思ったら、理性の正しい使い方をちゃんと知っている必要がある。理性は客観性と普遍性の能力だ。どんな問題でも他人ごとにする。ちょっと修行がいるんですけどね。それができたら、本当に強くなりますよ。週刊誌に書いてある芸能人の悩みなんかでも、本人は身も細るほどに悩んでいるんですけど、奥様方はちょっと読みかじっただけで、「こんなことはこうすればいいのにね」と一発で正しい答えに行ってしまうんですよね。それほどに、他人の問題はよく見えるんですよ。**

**私も高校時代、そういう体験がありました。数学の問題で解けずに悩んでいた。同じ問題で友人も困っていた。それで私に相談に来たんですよ。自分が解けない問題ですから困ったなと思ってたんですけど、でもなんか相談されたら、助けてあげようと思って考え始めたんです。そうしたら突然閃いて、「こうしたらいける」と。気づきというか発想が出てきて、解けたんです。自分一人では解けない、他人からどうしたら良い？と聞かれたら解けた。他人に教えようとする客観的な視点が自分に出来たということもありますね。教えてあげようという愛が加わったことによって、自分一人で自分のために頑張って考えていた割には出てこなかったものが、教えてあげようという客観視と愛の働きによって、そういうことになったのかなと思っています。今でもこれは非常に重要で貴重な人生体験として覚えています。理性は物事を客観的に外から眺めて、普遍性というのは皆のことを考える。全体を考える。これが理性能力の役割であります。そのことをちゃんと理解していると実は強い。とはいっても、人間は不完全だ。それでもなかなか乗り越えられない問題はどうするか。**

**それは、最後の「三人寄れば文殊の知恵」というものです。自分でどうしようもないという場合には、自分の考えとあと２つの違った考えを引っ張り出して、３人の考えを統合して、３人の考えをガッチャマンして統合して、そして考えていけば、仏の知恵に近づくことができる。３人の人間の考えを統合して、考えを進めていったら仏様の知恵に近づくことができるということ。自分の考えの限界を超えることができる。**

**なぜ、３人なのか？ 現実には１人称２人称３人称ということで成り立っている。自分の立場から見ただけでも偏っている。相手の立場から見ても偏っている。第三者の立場から見ても偏っている。どんな立場から見ても立場がある限り偏りがある。偏見がある。しかし、その考えを統合することによって生きた現実に迫ることができる。そういう高次元の答えが出てくる。そういう考えが仏教にはあります。これが「三人寄れば文殊の知恵」という言葉です。自分だけではどうしようもなくなったら、その問題を乗り越えるために必要な力を持っているあと２人の人間を探してきて、彼らに助けてもらって３人で協力してその問題にぶち当たっていく。というのが人間が最後に問題を乗り越えるために使わなければならない手段なんですね。人間は助けてもらっていいんだ、自分自身の力だけでは限界がある。３人の力を合わせれば、生きた現実に迫ることができる。そういうことも考えておく必要があると思います。**

**とにかく最後まで物事を成し遂げる力というものをつくっていく、意志の強い人間になるためにはこういう方法論があることをわかっておいてください。ちょっと早めですけど休憩に入ります。**

**それでは後半の話に入ります。**

**とにかく人生は意志と愛のドラマ。本当に我々が幸せになりたい、本当に成功したい、納得のいく人生を手に入れたいと思ったならば、まずは意志の強さを自分のものにする努力をする必要があります。もう１つ大事なのは、人間関係ですね。素晴らしい人間関係をたくさんつくる力を養っていかないと、もっともっと幸せになることを可能にすることはできません。**

**そこで次の３番目ですね、「愛の実力を養う」。愛は人間関係の力ですね。人間関係から生じるすべての問題は愛の力の未熟さ、あるいは愛という力を使うことを忘れておって、理屈だけで人間関係を処理しようとするというところにも、人間関係の問題が出てきます。愛というのは人間関係全体を司る根本原理でありますので、人間関係を素晴らしいものにしていく、良い人間関係をたくさんつくろうと思ったら、とにかく愛の実力を養わなければならない。ところが今の時代は、愛の力が乏しくて、人間と人間を結びつける力が弱くて、人間関係に悩んでいる、苦しんでいる人が多いですね。愛に悩み、苦しむというのが現場の実状であります。**

**なんでそういうことになってしまったのか。一つには近代ずっと民主主義という社会の制度が続いて、その中で個人主義的権利を主張するということが当然のことのように行われてきました。皆が一人ひとり権利を主張するもんですから、お互いの権利がぶつかり合って、人間関係は壊れてしまうという結果になってしまっている。これも一つ現代社会における人間関係崩壊の原因であります。その他にも我々はなぜ愛に悩み、苦しむという状況になっているのかということに対する根本原因がいろいろあるんですけども、まずは権利を主張するということが人間関係を破壊することに結びついている。**

**第２番目は、人間が理性化されてしまった。ずっと近代何百年間、理性教育が続いてきて、結果として人間が理性的な人間になってしまって、人間的な人間ではなくなってしまった。人間自身が理性の奴隷となってしまった。どんなことでも理性で、理屈で対処し、処理し、判断する。それがずっと行われてきました。その結果として愛すら理性化されてしまった。その結果どうなったのか、同じ考え方の人としかやっていけない。同じ価値観の人としか仕事はできない。宗教が違えば、民族が違えば、価値観が違えば、戦争だ殺し合いだ。そういう状態になってしまった。これが理性化されてしまった理性の奴隷と化した人間の判断なんですね。**

**なぜ、理性化されると人間は殺し合うのか。それは理性は真理は１つと考えますから、考え方が違ったら確実に敵なんですよ。理性は矛盾を排除しますから、考え方が違う…違うという人間をのけ者にする、排除するという行動を起こします。また理性は、画一性を追求する。皆を同じにしてしまおうという画一化がね、理性の働きであって、共通するものをつくる能力なんですね。であるがために、すべての人から個性を奪う。そして自分とすべての人を同質化してしまう。これが現実であります。結果として同じ価値観の人としか仕事ができない、同じ考え方の人しか愛せない…そういうことになってしまいやすい。結果として離婚の激増が起こり、幼児虐待が起こり、宗教戦争・民族戦争が起こるという状況に世界はあるわけですね。**

**第３番目の原因は、愛というものがまだ人間が人生を生きる力としての文化になっていない。愛はまだまだ自然発生的な状況のまま放置されてしまっておって、愛は情緒・感情・本能・情熱という自然的な次元で放置されている。なぜ、愛を文化にしなきゃならんのか。それは人間が文化をつくる動物と呼ばれていて、あらゆるものを文化たらしめることによって、人間はそれを使って生きるということができる、そういう状態になるわけであります。人間は文化をつくる動物だ。文化というのは自然に存在するものに手を加えて、自然のまま以上にもっと素晴らしいものにしていく…これが文化というもの。**

**愛というものは、まったく文化とする努力がされていないわけですね。古代人が愛について悩んでいた同じ問題で現在人も愛について悩んでいる。古代の文学にも夫婦喧嘩とか親子の問題とかいろいろ出てくるんですよね。それと同じ問題で現代人も悩んでいる。源氏物語に出てくる男女のさまざまな感情のもつれの問題が出てきます。それと同じ問題で悩んでいる…愛には歴史がない。愛は自然発生的なもののまま放置されている。愛はまだ文化になっていない。文化とするというのは、愛を人間が人生を生きる力に変えていく。**

**その次の問題は、愛はまだ学問的に研究されたことがない。愛はもっぱら文学のテーマであって、文学の中ではさまざまなバリエーションが描きつくされていると言っても過言ではない。語られれば語られるほど、人間は愛に迷う。人生を生きる力にするためには、愛を学問的に研究して、愛の本質と理念を理解して、愛の力を成長させていくということをしてからなんです。これはまだ誰もやっていない。なぜ学問の対象にならなかったのか。愛は理屈抜きのもんだと考えられておったし、また愛は理屈を超えたもんだと考えられておったから、理性でものごとを考えていく学問の対象としてはふさわしくない、と考えられていた。愛はもっぱら随想、随筆、散文という風な各文化人が自分の愛についての思いを語るというのは残っているんですけど、愛についての学問的な研究は存在しません。今までずっと愛は学問の研究対象から外れていた。我々は未だに愛に悩んでいる。**

**最後の愛に悩む原因は、愛は能力だと考えられていない。愛というのは理性と同じように問題を解決することができる能力なんだと考えられていない。愛は感情だ、情緒だ、本能だと考えられていて、能力だと考えられていない。能力と言ったら理性だと思ってしまって、理性以外にいっぱい能力はあるんだと知らない。忘れてしまっている。実際問題、人間には潜在能力という理性よりも遥かに素晴らしい能力が命に潜在しているんだと。理性が限界に到達して、尚且つなんとかしようとすると、潜在能力が出てきてその問題を乗り越えさせてくれる。そういう理性を超える力の一つとして愛の力があります。愛は理屈を超える力だと昔から言われてきましたけど、残念ながらまだ愛は理屈を超える力として人生において使われるということがありません。けれど、これからは愛を能力として成長させていって、理性では解決できない問題を愛によって乗り越えていく。そのように人類は成長していかなければなりません。**

**とにかく我々が愛に悩み、苦しんでいる原因として権利を主張しすぎる民主主義社会の問題点がある。愛すら理性化されてしまっている。愛すら理性の奴隷になってしまっている。そして、愛が文化になっていない。学問として研究されたことがない。能力と考えられていない。能力とするならば、愛は命を生む・育む・満たす能力である。命は愛によって生まれたから、人間が最後に求めるものは愛なんですよ。愛によってしか命は満たされない。最後に人間が欲しいものが愛。金もいらん、物もいらん、最後に欲しいものは愛だ。命を生み・育み・満たす能力である。**

**そういう意味での愛の実力を養っていって、離婚の激増を止め、幼児虐待を防ぎ、高齢者への虐待を防ぎ、宗教戦争・民族戦争をなくしていく。そういう力を人類はつくっていかないと、今の状況では人倫の崩壊といって、人間関係がズタズタに引き裂かれてしまうというのをストップすることはできません。今こそ人類は愛の実力を養うことによって、新たなる文明をつくって、平和へと導いていく…そういう歴史をつくっていかなければならないときを迎えているわけですね。**

**今人類は世界的に皆、理屈じゃない心が欲しいと叫んでるんですよ。皆心を求めている。欧米においても今は心の癒しのセラピー流行りなんですよ。ストレスの多い、疲れ果てた心をどのように理性の支配や組織の支配、あらゆるがんじがらめからどう自分を解放するか、解き放つかということが今欧米においても全世界的に、大きな課題になってきている。全世界的にいって癒しのセラピー流行り、癒やしの産業というものはいろんな形で雨後の竹の子のごとく出てきているのが現状なんですよね。それほどまでに人々は心の癒しを求めている。心が欲しい。自分の心を本当に満たしてくれるものが欲しい、もう理屈はたくさんだ、というのが今の人々の本音であります。**

**心が欲しいとは一体何が欲しいのか。皆心が欲しいと思っているんだから、我々は心をあげなければ良い人間関係はつくれない。心をあげるとは何をあげることなのかを皆あまり分かっていない。だからまだまだ、現実には夫婦関係も理屈、親子も理屈、学校も職場も理屈だ。どこに行っても理屈さえ通れば物事は処理できると思ってしまっているような、そういう状況はまだまだ続いている。決して心が欲しいという叫びにほとんどまだ答えられていないというのが現状なんですね。**

**心が欲しいとは一体何が欲しいのか。皆さん方も仕事を通して体験されているでしょうが、お客様も理屈や説明よりも心が欲しいんですね。仕事をしてくれている方々の心遣い、思いやり、そういうものに客は感動して、アサヒグローバルに家を建ててもらって良かったというね、そういう感動をもって喜んでいらっしゃるというのが現実であります。心が欲しいとは何が欲しいのか。結論的には、認めてもらいたい。肯定してもらいたい。分かってもらいたい。褒めてもらいたい。信じてもらいたい。待ってもらいたい。そして愛してもらいたい。それが具体的な内容であります。心が欲しいということは、皆わかってもらいたいんだ。自分の気持ちをわかってもらいたい。そして認めてもらいたいんだ。自分のことを認めてもらいたいんだ。否定されたくはない。注意されたくないんだ。叱られたくないんだ。**

**まずわかってもらいたい。そして褒めてもらいたいんだ。信じてもらいたいんだ。そして急がさないで待ってもらいたいんだ。そして愛されたいんだ。愛されるというのは恋愛的なことではなく、人間的に好きになってもらいたい。そこに心が欲しいという命の叫びの内容がある。そういう心遣いとか思いやりとか心が欲しいという叫びに応えるという愛を持った人間に自分がなるためには、どういう努力を積み重ねていったら良いのか。**

**恋というのは自然に湧いてくるものですけど、愛は努力してつくっていく力なんですよね。恋はお互いに恋しい恋しいと思いやって、生物学的に言って子孫を残すために出てくる心情なんですね。結婚して子どもを産んでということになっている。このための恋なんだ。子孫を残すということを目的とするものではない。愛には男女の愛もあるけど、夫婦の愛もあり、親子の愛もあり、兄弟の愛もあり、師弟の愛もあり、仕事を愛するということもあり、国を愛するということもある。愛というのは恋よりも精神的に純化された世界で、必ずしも愛は子孫残すための生殖的な活動を目的にするものではない。**

**では、愛とは何なのかを考えるためには、愛というものを学問的に考えてみて、愛の本質をちゃんと理解しないと、愛とはなんなのかがちゃんと見えてきません。でも学問的に研究をするとはどういうことなのかと言ったら、学問というのは時間・空間という枠組みを使いながら物事を考えていくんですけど、愛における空間論的本質とはなんなのか、愛における時間論的本質とはなんなのか。そのように考えていって、それがわかってきたら、それをガッチャマンして、人間にとって愛の本質とはこうだともっていくのが、愛の体系なんですよね。**

**まず、空間論的と言うとなんなのか。空間というのはあらゆるものが横の関係で有機的に結びついている。そういう空間的構造を愛に適用するとどうなるか、愛は人間と人間とを結びつける力だ。人間関係の力だ。人間関係の前段は社会だ。社会とは現実的空間である。だから、社会とはなんなのかを考えていけば、愛における空間論的本質に到達することができる。社会とは、いろんな考え方の人がいて、いろんな性格の人がいて、いろんな価値観の人がいて、いろんな宗教の人がいる、それが社会だ。その社会の中で人間に求められる力は社会性と言われる。社会性とは、性格の違いと共に生きる力だ。考え方の違う人と共に生きる力だ。宗教の違う人と共に生きる力だ。宗教戦争をしている人たちは社会性がないんだ。性格が違うから一緒にやっていけないという人は社会性がないんだ。社会性がないということは人間性はないんだ。人間は社会的存在だから、人間性がないということは人間じゃないんだ。**

**そのように考えると、宗教が違うから戦争している人達は人間じゃないんですね。この理屈がちゃんと学問的に理解されたならば、大きな戦争の抑止力になりますよ。 宗教が違うからといって戦争しているということは、社会性がないんだよね。社会性がないということは人間性はないんだ。人間は社会的存在だから、人間性がないということは人間じゃないんだ。俺たちは人間じゃなかったんだねとなります。恥ずかしくて戦争なんかしてられるかということになってきますから、それだけでも大きな戦争の抑止力になる。残念ながら社会とは何かという問題もまだ真剣に考えられたことがないんだ。本当に国連に全世界の代表者が集まって、社会とは何なんでしょうね。それを本当に考え始めたら結果として戦争なんか恥ずかしくて出来ないとなってしまいますよ。こういうことすらまだ哲学的に分析されたことがないんですね。だから平気で民族戦争をし、宗教戦争をし、考え方が違うから対立しているという状況が平然と行われている。だけど、愛を空間論的に学問的に考えれば、愛とは考え方が違い、価値観が違い、宗教が違い、性格が違う人と共に生きる力を愛という。愛とは社会性だということがわかってくる。すなわち愛とは他者と共に生きる力、考え方の違う人と共に生きる力なんだ。だから愛は理屈を超える力だ。同じ考え方の人間とばかり一緒に生きていっていいんだったら、考え方の違う人をのけ者にして排除していいんだったら、愛なんかいらん。理性だけで十分だ。だけどなぜ現実に愛が必要なのか、それは性格が違い、考え方が違い、宗教の違う人も共に生きていかなければならないのが、現実の社会だからだ。そこに理屈を超える力が求められるんだ。愛は矛盾を生きる力だ。**

**愛の現実的な原理は努力なんですよ。相手のために努力する気持ちがある限り、愛は残っているけども、相手のために努力する気持ちがなくなったら、愛はなくなったんだ。自分が相手のことをどの程度愛しているかは相手のためにどの程度の自己犠牲的努力を払う覚悟があるか、それを見ることによって自分の相手に対する愛のレベルがわかる。相手が自分のことをどの程度愛してくれているかを知るには、相手が自分ならどの程度の自己犠牲的努力を払ってくれるかを見れば愛の強弱がわかる。愛は努力してつくっていく芸術なんだ。文化の最たるものは芸術です。本当に我々が矛盾を活かして矛盾を生きるという、矛盾を排除しないで受け入れていったとき、人間の愛は芸術という輝きを発する。すごいなという思いになる、感動する。そこに愛の力の偉大さ、素晴らしさ、凄さがある。そういう愛の力を我々は目指していかなければならない。**

**いちいち親が子どもが言うこといかんとムカついておったら、それは親の愛じゃないですよ。親子の愛というのは血縁という理屈を超えた関係で結ばれてるんですよ。理屈で考えている限り、親子の間に真実の愛はありません。親子の愛は血縁によって結ばれた愛なんだ。理屈を超えなければ、親子の愛は真実とは言えない。理屈を超えるとは、考え方が違ってもそれを認めて受け入れて、さらにそれをちゃんと肯定しながら付き合っていけるというのが、理屈を超えた血縁という関係性に基づく親子の愛の真実だ。なぜ、親は子どもが自分の言うことを聞かないからと言ってムカついてはならないのか。子どもというのは、生まれながらに反抗をして成長していくという成長の仕方がプログラムされているんですよ。**

**生まれたときから第一・第二反抗期という反抗することによってしか自分にはなれないという、生き方がちゃんとにプログラムされてるんですよ。だから子どもを反抗させてあげないと、その子らしい個性を持った人間に成長できないんですね。ちゃんと反抗しながら成長していくとプログラムされてるんですけど、子どもはお父さんお母さんが好きなんですよ。だから、親を困らせたくない。ついつい子どもは親の言うことを素直に聞いて、やっていこうと思ってしまう。親は喜び、良い子だと褒めてくれる…そうすると、ますます従順で素直な子になってしまう。従順で素直ということは、子どもの命からすれば自分を抑えて我慢している。だから、親は従順で素直だからといって褒めてはならない。そうであったのなら、よく親のために協力して頑張ってくれて、我慢してくれてありがとうと言って、子どもの愛ゆえの努力に感謝して、耐えている努力をちゃんとわかってあげる。そういう配慮をしないと、ずっとストレスがたまってしまって、ついにはグレてしまう。**

**第一反抗期は欲求に基づく反抗なんですけど、第二反抗期は理性に基づく反抗で、先生や親の言うことにそうは思わないと反抗する。言うことを聞かすために押さえるということになってしまうんです。それではこの子どもの個性を奪ってしまう。大事な教育の仕方というのは、子どもに反抗をさせることによって、その子がどういう思いを持ち、どういう欲求・考えを持っているかをわかってあげて、その子の意見で世間を生きていくことができるように導いてあげるというのが、本当の教育の姿であります。そういうふうに考えてるんだったらこういう本を読んでみたらどうか。その子の思いに沿った成長の仕方をさせてあげるというのが、反抗を利用して子どもを育てるやり方です。反抗というのは自分を表現しているんですから、その反抗を通してその子をわかってあげて、その子の思いに沿った成長の仕方をさせてあげるというのが、親の教育であります。**

**考え方の違う人と共に生きていく力が親にも要求されてくる。でないと本当に親は子どもを人間として育てるという力を持つことはできません。子どもを育てるためにも理屈を超えた矛盾を生きる、考え方の違う人と共に生きるということが親にはやっぱり求められているわけですよね。すべての愛に、すべての人間における愛には、考え方や価値観や宗教や性格が違う人と共に生きるという、矛盾を生きる愛が避けることのできない力として求められています。特にこれからは画一性の時代から個性の時代へと入っていきますから、個性を認めれば認めるほど、我々は矛盾を生きるという考え方の違う人と共に生きる、愛の力を必要とするわけですよね。理性の時代を去って、そしてこの理性では対応できない矛盾というものを活かして矛盾を生きる力、これから迎える新しい時代を生きていくために人類が必要とする力です。この力ができないと、平和なんて永久にありえません。とにかくこれからの企業の健全な在り方においても、また社会の健全な在り方においても今ほど愛の実力が切実に求められている時代はありません。愛とは矛盾を生きる力だ。**

**もう１つ、愛における時間論的本質があります。時間論的というのは、愛というものはどういう時間的な経過に従って出てきたのかということを考えることによって、愛とはなんなのかということを結論付けるというのが、時間論的な愛についての考え方で、愛というのはまず出発点としては、種族保存の欲求から出てきたもの。種族保存の欲求そのものから出てくるのは恋なんですよね。そしてそれからさらに進化していって愛という精神が生まれてくる。愛とはなんなのかを時間論的な観点から考えると、愛と恋との違いを明確にしないと、愛とはなんなのかがはっきりしない。**

**そこでまず恋とはなんなのかを、まずは考えてみます。恋というのは先ほど申し上げたように、恋とは子孫を残させるために自然に命から湧いてくる心情が恋なんですね。最終的に生殖活動をして子孫を残させるということを目的に生じてくる心情であります。恋の出発点は、まずは人を好きになるという好き嫌いから始まる。好き嫌いの時点では、まだ恋ではない。恋という状態になると好きな人を他の人にやりたくない。その人を私のものにしたいというのが恋なんですよ。恋しいという心情は、ただ好き嫌いと言っている次元とは違って、あの人を自分のものにしたい、あの人を他の人にやりたくない…そういう気持ちの表れが恋しいという心情の段階であります。そういう心情が出てくるとどうなるか。だんだんだんだんと、あばたもえくぼという状態になってくる。短所すら長所に見えてくる。あばたもえくぼという状態を通り過ぎると、恋は盲目という状態になってきて、相手の本当の姿が見えない。相手を理想化してしまう。理想化したイメージを通して相手を見るもんですから、いつでも相手はかっこよく見えて、いつでも完全無欠。**

**なぜ、恋をすると最終的にそういう状態になるのか。相手の本当の姿が見えていたのでは、誰も結婚したいと思わない。結婚したいと思わせないと、子孫は残せません。結婚したいと思わせるために短所も長所に見えて、だんだん相手の姿が見えない。完全に理想化された状態でしか見えない。結婚させるために盲目にしてしまう。結婚すればひとつ屋根の下で暮らすことになる。一緒に暮らすということは、離れて暮らしていた恋しいという思いは萎んでくる。恋しい、恋しいという心情が萎んでくると、相手を理想化する心情も萎んでくる。そうなると、日を追うごとに相手の短所・欠点が目についてくる。なんでこんなのと一緒になっちゃったんだろうと思って反省しちゃったりなんかする。その状態が続いていって、結果としてあばたがあばたに見えて、えくぼがえくぼに見えて正気に返ってしまうと。この正気に返ったところから愛が始まるんだ。**

**結婚は人生の墓場じゃない、結婚というのは恋の墓場だ。結婚は恋の墓場で愛の始まりなんですよ。なんで結婚は愛の始まりだと言えるか。人間を愛するということは、不完全な存在を愛することであって、人間を愛するということは、完全無欠のロックンローラーを愛するようなもんやないですね。不完全ということは、人間は誰しも長所半分、短所半分。半分ずつというのが人間性のバランスなんだ。人を愛するということは、自分にとって嫌なところを半分も持っているやつを愛するということが、人間を愛するということの現実であり、真実なんだ。短所を許せない人間は、人間を人間として愛する資格はない。人間を愛するということは、長所も短所も丸抱えなんだ。長所は簡単に愛することはできても、短所を愛するということはなかなか難しい。短所を愛する力をつくっていくところに愛の努力の目標がある。そして、短所すら愛することができるようになったとき、愛は芸術になる。努力しなければ手に入らない最高に美しい力。そこまで行かないと、我々は本当の愛の実力を持って人と関わることはできません。**

**そのためにはどうしたら素晴らしい人間環境をつくることができるのか。どうすれば短所すら愛せる人間愛を自分のものにできるのか、そのことを考えていく必要があります。まずは、なぜ人間には長所・短所が半分ずつあると思わなければならないのか。その根拠はなんなのか。とにかく人間と接する場合には、どんな人間でも必ず長所半分、短所半分という構造がある。どんな人でも自分から見て嫌だと思うところ、軽蔑したくなるところ、非難したくなるところが、どんな立派な人間でも半分はあるんだ。そのことをちゃんと分かってないと、人間関係は長続きしません。**

**なぜ長所・短所が半分ずつなのか。人間も大宇宙の一部分なんだ。宇宙とはなんなのか、宇宙とはプラスのエネルギーとマイナスのエネルギーが約半分ずつあって、それぞれがエネルギーバランスを模索しながら、宇宙の秩序をつくっているのがエネルギーバランス=宇宙の摂理の力だ。その力であらゆるもの、万物をクリエイトした。宇宙に存在するあらゆるものの基本的な在り方は、調和作用・平衡作用・バランス作用なんだ。なぜ、星が丸くなるのか。それは３次元という空間の中でバランスを追求すると球体になる。バランスを取ろうと思ったら、原理として相反するものがあって喧嘩してないで協力しながら、働くということがバランスを取るという機能の成立の仕方であります。だから宇宙というのはすべて対存在。相対するものは一対となって存在するという構造になっている。だから、プラスにはマイナスがある。陰には陽があるし、また光には影があるし、善には悪があるし、美には醜があるし、真には偽があるし、清には濁があるし、男には女、動物には植物、全部一対という対構造で宇宙は出来上がっている。これが、すべてのものは宇宙の摂理によってできていることの証明であります。人間には長所も短所もある。それらは自分でつくるんじゃなない。宇宙の摂理によって与えられたもの。だから、長所も短所も大体半分ずつあるということになる、と考えなければならない結論になる。**

**世間から尊敬されているような立派な方でも奥さんに聞いたら、「あんな人になってしまった」「どこがそんなにいいの？」と。これは避けがたい人間の宿命なんです。どんな好きな人と付き合うときでも、一緒に長くいたら、必ず自分から見て嫌だなと思うところが半分は出てくる。最終的には相手の中に自分にとって嫌だなと思うところが必ずある。それは覚悟していないと、しょうがないんだ。そういう人間観を持っていないと、人間と長く付き合うことできません。だけど、愛というのはその嫌なところも愛する力なんです。そんなことがどうしたらできるのか。それができたら、まさに芸術だ。そういう能力を自分のものにしようと思ったら、どういう努力をセントバーナード、せんといかんか。**

**まずは、短所がなかったら人間ではないんだということをおさえることです。人間には短所が半分もあっていいんだ。なかったおかしい。だから、短所をなくす努力をしたらいかん。短所をなくさせる努力をさせたらいかん。でも、「短所はなくさなくてもいんだ」と、開き直ってしまってはダメ。短所があるだけでは人間ではない、人間になるためには自分の長所も短所もしっかり自覚していないといけない。なぜなら人間の本質は理性じゃない心だ。人間らしい心とは、謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは長所じゃない、短所だ。短所があってはじめて人間は謙虚になれるし、短所がなくなってしまったら、人間が謙虚になる理由がなくなる。自分の短所をしっかりと自覚することで謙虚な心はつくられる。短所の自覚を持たせることが人間をつくる第１原理であります。**

**そのためには年に一回くらいは紙を配って、縦に半分に仕切って、左右に自分の長所、短所を書いてもらう。自分で自分の長所と短所を自覚してもらって、わかっている状態にする。また、自分の長所、短所がわからない人もいますから、上司や同僚や部下から見たらどう見えるかも大事になります。その自己評価と上司や同僚や部下の４つの評価を統合して、自分を知るということもする必要がある。自分の長所、短所をはっきり自覚しているということは、人間としての土台ができるんですね。短所が出てきたら嫌われてしまいますから、短所が出てこないように注意をする必要がある。「君にはこういう短所があって、それが出ると他の人に嫌われちゃうから、あんまり出てこないように注意しようね」ということは、ちゃんと愛を持って言ってあげなければならないということです。自分でもあまり短所が出てこないように注意をするということは必要です。うっかり出てきてしまったら、即座に謝る。昔の孔子の言葉にもあるように「過ちては則ち改むるにること勿れ」ということ。間違ってしまったら、即座にごめんと謝ることで許してもらえる。間違っているのになかなか謝れない、言い訳ばかりしているのは醜い姿だ。過っても謝れない…これを過ちという。とにかく、人間は不完全ですから失敗をしたり、罪を犯したり、間違いをする。すぐに謝ることが大切です。竹を割ったような態度で過ちを謝することが大切です。**

**人の短所を発見したら責めたらいかん。それをする人に血の通った温かな心は微塵もない。人の短所を発見したら助けてあげよう、助けてあげたい、役に立ってあげたいと思うことが血の通った温かな心があることの証明になるんだ。短所を活かして、愛を芸術の領域に高めるためには、自分の短所をさらけ出して相手に助けを求めて、助けてもらったら相手に感謝して褒め称えて、そして尊敬する…そういう力=活人力をつくっていく。自分の短所をさらけ出す勇気のない人間に人を輝かせる活人力を持つことはできない。人を助けてあげることも立派だけど、助けてもらうことも立派だという、そういう価値があるんだ。助けてあげることも助けてもらうことも同等の価値がある素晴らしい行為だ。助けてあげるばかりじゃ相手を惨めにする。助けてあげて、助けてもらってバランスが取れる。助けてあげるだけじゃ相手を惨めにする。地位が上がれば上がるほど、人間は自分の短所をさらけ出す勇気を持つ必要がある。昔から「実るほど頭を垂れる稲穂かな」という言葉があるように、地位が上がれば上がるほど部下が増えてくるんだから、ほとんどの仕事を部下にやってもらって、そのためには自分の短所をさらけ出して、相手を褒め称えて、それによって相手の能力を引き出してあげて、そしてその人を自分を超える人物に成長させるという。そういう育て方、人を育てる力を持つのも活人力ですね。そういう力を我々は養っていく必要があります。**

**こういうことができてくると、我々は短所をマイナスとは考えなくなってくる。短所を活かすことによって愛の実力を成長させることができる。短所を活かすことによって、愛は芸術となり得る。短所に対する力だけではなくて、長所も使っていなければなりません。あまり短所ばかりさらけ出してしまうと、バカにされますからね。そうされないために、何か一つくらいは自分の長所と呼ばれるものを伸ばして、他人から「このことについてあの人はすごい」と言ってもらえるそういう長所を伸ばして、他人から一目置かれる能力をつくっておかないとバカにされますから。そのために長所を伸ばして、人の役に立つ力をつくっていくということも考えておかなきゃならない重要な課題であります。**

**長所というのは威張るためにあるんじゃない、人の役に立つためだ。長所を伸ばすのも愛の努力だ。人の役に立つために我々は長所を伸ばさなければならない。自分の短所をさらけ出して、相手に助けてもらって相手に感謝をする。特に人と会ったらその人の良いところがまず見えてくるという、そういう自分に成長していないと、ちょっと会ったらその人のダメなところが見えてきちゃうというようじゃ、人間性が貧しい。人と会ったらその人の良いところがまず見えちゃうと、そういう人間になることが愛の努力としては必要であります。良いところを見つけ出して、相手の良いところを褒めて伸ばしてあげて、そしてその能力を使わせてもらう。そのことによって相手の存在は輝く。このように考えていることを時間的な観点からなんなのかと言ったら、愛とは短所を許し補い、長所と関わる力である。愛についての規定が生まれてきます。昔からよく映画に出てくるあのセリフですけど、「愛するということは、許すことなのね」と。愛するとは許すことだ。**

**そこに人間への愛というものの根本の原理があるんですね。短所を許せない人間は人間を愛する資格がない。短所があってこそ人間だ。短所があるだけでは人間ではない。自分の短所はなんなのかを知って、初めて人間だ。だから謙虚になれる。長所も短所も活かして使いこなしていくことによって、我々は愛をただ現実を生きる力だけではなくて、芸術という美しい力に変えていくことが出来るわけですね。**

**とにかく、どんな人間と接する場合でも人間は基本的に長所短所を半分ずつ持っているんだ。短所はなくならないんだ。なくそうとするバカな努力はしたらいかん。相手の良いところと向かい合って、良いところと付き合って、良いところをお互いに利用しながら生きていくという生き方を覚えなければならい。大事なことは長所を伸ばすと短所は人間の味に変わるんですよね、人間味。長所を伸ばさないと、短所は永久に短所のままで嫌われるんですけど、長所が他人から一目置かれるような力を持ってくると、短所は人間の味に変わる。「あんな凄い力を持っている人でもこんなところがあって面白いね」と。短所は親しみを感じるところに変わってくる。そういう評価に変わってくる。これが長所を伸ばす効果。**

**長所を伸ばして、短所が人間の味に変わる状況を何て言うか、これを角熟。角ばったまんま、そのまんま東で熟していく。昔は円熟ばかりでしたが、円熟では真ん丸になってしまうから、個性がなくなる。人間は皆個性がある。だから、角ばったまんまの角熟になる。短所を決して恥ずかしいと思ってはならない。短所も活かして使えば輝くんだ。短所をどう活かすか、短所をどう輝かせるかに不完全な人間が人生を生き切るコツというか極意というか、そういうものがある。とにかく短所の存在を許せない人間は、人間を人間として愛する資格はない。短所があってこそ人間だ。短所はなくならないんだ。人を愛するとは長所も短所も丸抱えで愛することだ。短所の存在を許さない、短所の存在を愛せない、認められない人間は、人間を人間として愛する資格はない。あらゆる人間関係において、これは忘れてはならない重要な原理ですね。相手の短所は自分が補ってあげなければならない。自分が役に立ってあげなければならない。自分の長所を磨くのは威張るためではない、役に立つためだ。**

**愛の実力を磨いて、そして矛盾を愛する、理屈を超えた愛の力を手に入れようと思ったら、我々は愛は他者と共に生きる力であり、短所を許し補い、長所と関わる力である。こういう愛についての愛の本質への理解をちゃんと持っている必要があります。このことが分かってくれば、確実に人類の人間性は今の段階よりももう１次元高いレベルへ飛躍的に成長することができる。まだ今の人類は、今申し上げた愛の本質を全く理解していない。だから常に対立し、憎しみ合い、殺し合うという状況からなかなか脱却できない。未だに愛はまだ我慢になってしまっている。お互いを解放して、お互いを活かし合うということは、まだまだ現実にはできていない。**

**最後に、我々が愛の実力を磨く究極の目標は、「血の通った温かな心遣いができるか」にあるわけです。同じ考え方の人間とばかり付き合っていたら、心遣いはあまりいりませんよ。だから心遣いをしなくなりますよ。だけど、違った考えの人間と一緒にやっていこうと思うと、いろいろ心遣いをしたり、思いやりが必要になってくる。そのことによって我々は心の豊かさ、人間性の幅、人間性の豊かさがだんだんだんだん出来上がってくるわけですね。人間がお互いに信じ合って、許し合って生きるという状態をつくっていくことは、人間としての命の欲求なんですよね。我々の命の底から湧き上がってくる欲求は、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいという気持ちなんですよ。できることなら皆喧嘩なんかしたくない。できることなら戦争なんてしたくない。できることなら憎しみ合いたくないんだ。だけど現実は、理性によって血の通った温かな心は奪われて、理屈ですべて処理しようとする。そこに考え方の違いによる対立・憎しみ・殺し合いが生まれてくる。**

**どうしたら血の通った温かな心を取り戻して、人間らしく我々が生きていくことができるのか。そのためにも考え方の違う人間と共に生きる。価値観の違う人間と一緒に仕事をする。宗教の違う人間と一緒に生きていける。そういう新しい次元の人間の生き方を切り開いていかなければならない。そのためにどうしても心遣いが必要なんだ。相手の気持ちがわかる、心の通い合い、心の結びつき、命の絆というものをどうしたら我々は強固にしていくことができるのか。今の時代は本質は心だと言われている時代で、これまでの人間の本質は理性だ言われていた時代とは全然違ってきてますからね。この人間観の激変を企業の在り方に取り入れていけばどうなるか。理性の時代においての企業では、仕事の結びつきと役職の結びつきというもので合理的に動いていた。だけどこれからは理性ではなく心だということですから、根底に心の結びつき、心の通い合い、そういうものが企業の根底に求められてくる。そのことによって企業は理性的な組織の在り方から、人間的な組織へと生まれ変わることができる。心の結びつき、心の通い合い、そういうものがどういう風に企業の中でつくられていくか。そこに人間的な組織の基本があると思います。**

**血の通った温かな心遣いがお互いにできるという状態なんですけども、そういうことができる組織がどのようにしたら出来上がっていくのか、そのことのために我々が考えなければならないことが、愛の実力。考え方の違う人と共に生きていくことが、人間的な生き方として大事なんだということをちゃんと分かる、知る。短所を責めないで、短所がなかったら人間ではないと。そういう意識が自分の中にあることによって、温かな心遣いができる人間になれる。そして人間が本当に求めているのは、認めてもらいたい。分かってもらいたい。褒めてもらいたい。許してもらいたい。愛されたい。そういう心情なんだ。そういう心の叫びについて、我々はどう応えてあげられるだろうか、それもちょっと考えていかなければならない。**

**組織の中で仕事をしている限り、いろいろと失敗もあるし、注意をしなければならないときもあるし、叱らなければならないときもある。人間に対する場合には、まず心が欲しいという叫びに応えてあげることが非常に大事なことであって、それが出来なければ注意したり叱ることによって人間関係は壊れてしまう可能性がある。そのためにまずは、人は褒めてもらいたいんだから、まずどんなに失敗したり、いろいろ問題があった場合でも、その人の良いところを褒めてあげるところから。その次に叱って注意して、最後にもう一度褒めてあげて終わるという。心に対する接し方を覚える必要があるわけです。誰も人間は叱られたくないし、注意されたくない。だけど注意しなきゃならない、叱らなければならない、教育上避けがたい課題ですね。人間関係が壊れるということならないように、どうすれば効果を発揮できるか。それを考える上でも、まずは理屈じゃない心が欲しいと思っているんだから、その心が欲しいという叫びに応えてあげて、認めてあげる。**

**よく嘘を言うことがあるんですけど、嘘を言っていいわけではないんですが、けれど、嘘を言わない人間は冷血漢なんですよ。嘘を言う人間は心遣いをして考える人間なんですよ。相手が自分に嘘を言うとムカつくんですけど、自分が誰かに嘘を言わなければならない状況を想像すると、どんなに苦しむか、どんなに悩むか、どんなに思案するか。それを思うと、嘘を言う人間の心の中が見えてくるんですね。嘘を言う人間の方がむしろ心遣いをしている。嘘を言わない人間は心遣いをする必要がありませんから、事実を言うだけ。嘘が良いというわけではなく、言わなければならない状況に追い詰められて、言ってしまう人間の辛さ、苦しさ、心遣いを考えてあげる必要もあるわけです。**

**子どもが親に嘘を言うこともあったりなんかするんですけど、普通のお父さんお母さんだったら「嘘言っちゃだめじゃないの」と注意をするんですよね。それでは子どもと親の心の繋がりは断ち切られるんですよ。親の一言で。そう言われると子どもはどう思うかと言ったら、「嘘を言ったらいかんことくらいわかっとるわ。何でそういう状況になって悩んで困っている自分のことをわかってくれないのか」という気持ちが子どもに湧いてくる。お父さんお母さんに何言っても無駄や、と。だんだんだんだん親に何も言わなくなる。子どもは親に嘘を言ったとき、親はどういう対応をするべきか。親子の関係は理屈を超えた血の繋がり。理屈を超えたことを言わないと親子の関係は断ち切られてしまう。**

**どうするのか。「なんであなたがそんなに苦しんでいたのに、なぜ早くその苦しみに気が付いてあげられなかったんでしょうね、ごめんね」と言って子どもを抱きしめて、子どもに謝って涙を流す。そうすると、「やはりお父さんお母さんだ。嘘を言ったのに俺の辛さをわかってくれている」となって、理屈を超えた血縁による命の繋がりが初めてそこでしっかり結ばれるんですね。「嘘を言っていたらダメじゃない」と理屈っぽいことを言うと、親子の心の繋がりはプチンと切れてしまう。「全然俺の辛さなんてわかっていない」と。だけど、嘘を言った子どもを抱きしめて謝るだけでは甘やかし。理性があるから、その後に「だけどやはり嘘は言ってはダメなのよ。今度、こういう状況になったら私たちに相談しなさい」と。「親子じゃないの、どんな問題でも解決できる」とすると、血縁による理屈を超えた愛の示し方がそこに出来上がるわけですね。**

**誰かが誰かを裏切ったとき、「あいつが俺を裏切るなんて…いや、大変なことがあったに違いない。どんなに辛かったか、苦しかったか、大変だったか。可哀想に」というのが、本当の友情なんです。普通なら「あいつは俺に嘘を言った。もうあいつのことは信用しない」というのが理性なんです。「大変なことがあったに違いない。どんなに辛かったか、苦しかったか、大変だったか」と思ってあげるのが血の通った温かな心の表現なんだ。皆が見放しても、俺だけはあいつのことを信じてやると。そうされた相手は、皆が自分を見放したのに最後まで残ってくれた…今後は俺の番だ！と何かあったらひと肌でもふた肌でも脱がないかん、ということになる。これが理屈を超えた友情の結びつきであります。心の繋がりのつくり方であり、理屈を超えるという仕方で心が結ばれていく原理なんですね。とにかくこれからは理屈を超えるという愛の力が非常に大切な時代になってきました。ぜひ、いろんな場面でこういうことを思い出して、一度使ってみてください。どうもありがとうございました。**